

引き出しの抗菌薬

あなたの家の引き出しには以前にもらった抗菌薬（抗生物質のこと）が保管されていないですか？

「また熱が出たときに」「なかなか医療機関を受診できないから」などの理由からでしょう。どうしてこれが不適切か、これから説明します。

薬剤耐性菌：抗菌薬が効きにくい細菌（薬剤耐性菌）による感染症が増えています

世界中で耐性菌への対策が訴えられており、2016年に日本政府が薬剤耐性対策アクションプランを策定したことはご存じと思います。

昨年末に公表された国際医療センター病院の調査によると、日本では代表的な耐性菌2菌種による感染症で年間約8000人が死亡しており、交通事故の死者数よりも多いとのこと。

この2種類にはまだ有効な薬がありますが、耐性菌にもいろいろな種類があり、中にはほとんどの抗菌薬に耐性で、日本国内では有効な抗菌薬が入手しにくいやっかいな細菌も存在します。

抗菌薬が効かない細菌はどうして増えてきたのでしょうか？

すべての細菌に効果のある抗菌薬はありません。

人間の体内にはさまざまな細菌が住んでいて、ある薬を使うと、その薬が効かない種類の細菌が生き残ります。その中に薬剤耐性菌も含まれ、増えてきます。また、新たに細菌が突然変異を起こしたり、他の細菌から耐性因子という情報を受け取って耐性菌になったりします。

対策は不適切な抗菌薬の使用を減らすことです

一般の人を対象として国際医療センター病院が行った「抗菌薬意識調査2018」によると、抗菌薬が効く病気として、「かぜ」を50%が、「インフルエンザ」を49%の人があげていました。どちらもウイルスが原因の病気で、抗菌薬は効果がないので誤りです。

必要のない「かぜ」には抗菌薬を求めないようにしてください。

感染症によって抗菌薬の種類と必要な期間は決まっています：短くても長くても不適切です

抗菌薬が処方されたときは指定された期間、きちんと飲みきることが大切です。

最初に戻って：多くの家庭で、飲み残しの抗菌薬が保存されています

残った薬を「熱があるから」と自己判断で飲むことは不適切な使用にあたります。感染症はいつも同じではありません。

また、薬を知り合いにあげることは危険です。体質によって予期しないアレルギー反応などの副作用が起こる可能性があり、場合によっては命に関わることもあります。

抗菌薬は「富山の薬」や痛み止めとは違うので、置き薬にはしないでくださいね。

【小児科診療部長 桑島 信】

